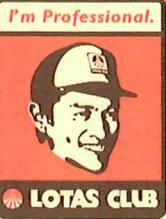




2025年1月号

ロータス東海の ちいらしっこ通信

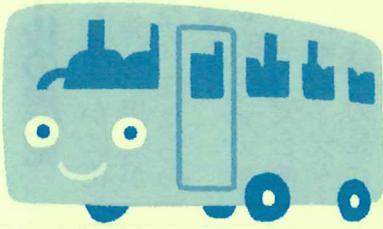


今月のちいらしっこ話

【笑顔のバス】

「冷たいお水と、保冷剤と、ハンディファンも持った。よし、行ってくる。」母に声をかけて私は家を出た。我が家から70m程先にあるバス停の前にある集合住宅に住むたつくくんは、人懐っこい性格でバスが大好きな4歳の男の子だ。バス停でバスを見ると「うたつくくんの日課に付き添うお母さんとは、いつからか挨拶を交わすようになった。やり取りをするなかで、たつくくんが闘病中で赤ちゃんなの頃から入院と退院を繰り返していることを知った。ひょんなことから、夏休み中の5日間、私はたつくくんの日課に同行することになった。ほんの15分程のこととはいえ、小さなたつくくんがうだるような暑さで体調を崩さないか心配した私は、入念な準備をして臨んだ。そんな心配をよそに、炎天下でもたつくくんは、元気にバスに関しての豆知識を話し続け、お目当てのバスが来ると嬉しそうにはしゃいだ。つないだ手を通して喜びが伝わってきた。可愛さ、この上なしだ。しかし、5日目はたつくくんの口数が少なかった。そして、去っていくバスの後ろ姿を見ながら、「バスのお顔が寂しそうだった

ね。明日から、たつくくん、病院だから。会えないからかな。」と消え入りそうな声で言った。寂しいお顔なのは、たつくくんの方なんだね。私はつないでいる小さな手をぎゅっと握った。たつくくんを送り届けて自宅に戻った私は、画用紙を出してきて黄緑色のバスの絵を大きく描いた。バスの表情は、もちろん笑顔だ。祈りとエールを込め、丁寧に仕上げた絵をたつくくん宅の郵便受けに入れておいた。数日後、塾から帰宅すると郵便受けに黄緑色のリボンが付いた筒状の紙が入っていた。その場でリボンを外すと、思いっきり口を開けて笑っているバスの絵が現れた。たつくくんが笑ってる！安堵に包まれ、胸が熱くなった。たつくくんが戻ってきたら、また笑顔のバスを見に行こう。涼しげな風鈴の音が聞こえ



ロータス工具クラブ

トルクレンチ



トルクレンチは、20世紀初頭に登場した精密な工具で、自動車や航空機の整備に欠かせない存在です。

発明者はアメリカの技術者、コンラッド・バーノン・バーンハムです。彼は1930年代に、ボルトやナットを一定の力で締める必要がある作業に対応するため、トルクレンチを開発しました。「トルク」とは回転力を意味し、工具の名前はこの機能に由来しています。使い方は簡単で、トルクレンチに設定したいトルク値を入力し、ボルトやナットを締める時、その設定値に達した時点で「カチツ」と音が鳴り、それ以上の力をかけないように知らせてくれます。

クリック式、ビーム式、ダイヤル式、デジタル式など、さまざまな種類があります。それぞれ異なるメリットとデメリットがあり、使用状況や個々の好みに応じて選択されます。

一番使用するのはタイヤのナットの締め付けです。きちんとしたトルクで締めないと破損することがあります。強すぎても弱すぎてもいけません。

自動車整備では、多くの作業で正確な締め付けが要求されるため、正確なトルク管理により、車両の安全性と耐久性が確保されます。

ロータスクラブはCO2削減に取り組んでいます



